

〈調査報告〉

森幸安の地図を追って

——函館市中央図書館と国立国会図書館における調査報告

はじめに——幸安の地図と調査の経過

森幸安とは、江戸時代中期に活躍した地図考証家であり、『日本志』と呼ばれる作品を世に残した人物である。『日本志』の構成は、天文図、世界図、日本図をはじめとする日本六十八州各国の地図、都市図、神社仏閣図、景勝図など様々な種類の地図や洛中洛外や大和国などの地誌から成る。注目すべき点は、それらの地図を空間的かつ時間的に校合し、さらには現在情報を地図に満載させる努力をするなど、視覚的に地図を表現するところにあった（地誌は地図に付随する）。こうした地図は、これまで知られていた林吉永らの「観光絵図」や伊能忠敬の「実測図」とは性格が異なる「情報地図」とも呼ぶべき性格を持っていた。幸安は、土地土地を歩いてまわり（巡視）、その土地の人に尋ね（聞問）、過去の文献を調査し（閲）、様々な情報を総合的に捉え、「地の理」を全うさせる形で「情報地図」

を作製した。

従来、一九七〇年代に柴田勅夫氏の手によって幸安地図が目録化されたが、その頃判明していた幸安地図は、国立公文書館・金刀比羅宮図書館・京都市歴史資料館所蔵分だけであった。その後、一九八〇年代以降に、京都大学をはじめとする各博物館の地図目録が次々に上梓される中で、個別に幸安地図の存在が明らかとなってきた。ただし、幸安地図の解明はまだ誰も成し遂げていなかった。

そこで二〇〇一年現在で知り得る幸安地図をとにかく集めてみようとして幸安地図の博搜に努めた。その結果、国立公文書館他九機関に所蔵されている森幸安の地図の全目録を完成させ上述のような結論を得ることができた。これらの詳細については、辻垣晃一・森洋久編著『森幸安の描いた地図』（日文研叢書二九、二〇〇三年）を参照されたい。

ところが、その後、函館市中央図書館に幸安地図が七点保管

辻垣晃一

されていることが判明し調査を行った。本稿では、これらの新資料について報告する。

この件については、北海道在住の古地図研究家・高木崇世氏から、所在の旨ご教示いただいた。紙面を借りて、感謝申し上げます。

また、さらに、函館調査を進めていく中で、「森幸安（謹斎）編 日本輿地図 八十五枚 帝国図書館 二二三函 四八号」という記載のある付箋を見つけた。「帝国図書館」とあるため、国会図書館を調査してみると、国立公文書館等と関連する幸安自筆の原本と見られるものであり、本稿ではこれについても報告する。

一 新出の幸安地図——その一

函館市中央図書館所蔵分

収集し尽くした結果、もはや幸安地図はこの世に存在しないのではないか、だとするとかなり限定された史料で幸安地図の解明に努めねばならないのではないか、という前途多難な思いであった。そのような状況の中、高木氏のもたらされた情報によって光明が射しこんだと言っても過言ではない。高木氏のご厚意に感謝の気持ちでいっぱいである。

さて、函館所蔵分が自筆なのか写しなのか、そのいずれにせよ前著での位置づけはどうなるのか、あるいはこれまで知られていなかった情報が詰まっていらないだろうか、といった期待を

胸に函館へ飛んだ。

調査方法は、前著と同様、「表題」（地図の表紙に付された地図名）、「内題」（地図の中に書かれた地図名）、「成立年代」（識語に書かれた年記）、「内容年代」（地図の内容を示す年代）、「形態」（手描きか出版か、彩色か一色か）、「史料の性格」（自筆の原本か後世の写しか）、「大きさ」（地図を広げたときの寸法）、「備考」（その他必要な情報）、という項目を立てて行なった。また、備考欄に記した識語の書き下し文については、現代仮名遣いに書き改めた。

では、函館市中央図書館所蔵の新出幸安地図に関する書誌情報を記し、前著目録の不備を補いたい。

日本志東山道部

奥州南部之地図

図1

（表題）日本輿地東山道部 奥州南部管内地図

（内題）日本志東山部 奥州 南部之地図

（成立年代）宝暦二年八月 （内容年代）宝暦二

（形態）手彩 （史料の性格）原本 （大きさ）一五四・二×七
七・四センチ

（備考）「この南部の図は、奥州盛岡南部家の土中野忠右衛門という者、貯うる所なり。上方歴覧の刻、その盛岡南部家の用所宇野氏の宅に旅し、これによって、伝えて元文四年九月十三日宇野宗明写す。しこうして、同五年閏七月主税吉賢伝えて模

す。今時また予伝えてこれを校す。この図の体たるやなり。もつとも、詳密たるなり。○また外に南部十郡の図あり。これも鮮明なり。その図は仙台領二十一郡の図と併合して見るべきなり。この南部の図は、蝦夷の図と南北に併合して見るべし。しかればすなわち南部と蝦夷との方位、詳に知れり。いわゆる南部十郡は、ことごとく南部家の管領するところなり。よって、すべて南部と号す。」

奥州仙台管領地図

図2

- (表題) 日本輿地東山道部 仙台管内地図
 (内題) 日本志東山部 奥州 仙台管領地図
 (成立年代) 宝暦二年十月二十日 (内容年代) 宝暦二
 (形態) 手彩 (史料の性格) 原本 (大きさ) 一〇二・七×三八・六センチ
 (備考) 図版一九四識語にある「仙台管領二十一郡の地図」のこと。「二十一郡分界目安并村員貢量」あり。

奥州南部管領地図

図3

- (表題) 日本輿地東山道部 南部管領地図
 (内題) 日本志東山部 奥州 南部管領地図
 (成立年代) 宝暦二年十月二十一日 (内容年代) 宝暦二
 (形態) 手彩 (史料の性格) 原本 (大きさ) 七六・六×五七・四センチ

(備考) 「この南部の領は、奥州の地十郡を管す。図するところ、陸奥国南部家管領の地図は、すなわち南部氏の貯するところにして、その用所宇野宗明家蔵す。伝えて模す。その図、海帆之路数及び陸坂之曲斜等あり。しかりといえども、前の八月に著する南部の地図は、ことごとく陸坂海浜島嶼帆路等を載すゆえに、当国を除く。この図は、仙台領及び津軽領出羽国の地図等と併合して見るべし。しかればすなわち、出羽奥州の輿地大率足れり。」

奥州津軽之地図

図4

- (表題) 日本輿地東山道部 津軽管内地図
 (内題) 日本志東山部 奥州 津軽之地図
 (成立年代) 宝暦三年正月三十日 (内容年代) 宝暦三
 (形態) 手彩 (史料の性格) 原本 (大きさ) 七六・六×七七・〇センチ
 (備考) 「京師より、ここ「弘前へ二百八十餘里、三馬屋へ三百里ばかり」に至るまで、行程記「北のたつひより南の碇関まで三十四里」に見ゆ。」

陸奥国信夫郡福嶋地図

図5

- (表題) 日本輿地東山道部 奥州福嶋地図
 (内題) 日本輿地東山道部 陸奥国信夫郡 福嶋地図
 (成立年代) 宝暦五年九月朔日 (内容年代) 宝暦五

(形態) 手彩 (史料の性格) 原本 (大きさ) 七七・〇×五八・〇センチ

(備考) 「この図は、宝永五年に著す。按ずるに、今五十年を経るといえども、街路町区諸屋敷等の増減、多くは有るべからず。」

陸奥国白川地図

図6

(表題) 日本輿地東山道部 奥州白河地図

(内題) 日本志東山部 陸奥国白川地図

(成立年代) 宝暦五年十月上旬 (内容年代) 宝暦五

(形態) 手彩 (史料の性格) 原本 (大きさ) 七六・七×五七・五センチ

(備考) 「○この図は、元禄年間に著するところか。和州郡山故の本多家の蔵るところなり。慶安年より貞享の初めに至るまで、本多能登守忠義、同下野守忠平二代の間、この白河城に藩封す。ゆえに故の本多家にこの図あるか。しかれば、この図はその居城の時の著なるか。今なお相替わることあるべからざるをもって、模せずして輿地の部の地図とするなり。○当白川の地は、奥州南の端にあり。昔、蒲生飛騨守秀行管領町野長門守居る。寛永四年より丹羽長重、この白川の城へ藩封す。以降交易今に至る。○予が著するところの図、かくのごとき城ある者は、いまだ用いずといえども、当図は故の本多家の浪士、予に譲るのゆえに直に用いて東山道部の図とす。」

陸奥出羽両国地図

図7

(表題) 日本輿地 陸奥出羽両国

(内題) 日本志東山部 陸奥出羽両国地図

(成立年代) 宝暦六年十一月朔日 (内容年代) 宝暦六

(形態) 手彩 (史料の性格) 原本 (大きさ) 二三三・八×一一三・五センチ

(備考) 図版一九二の原図。

七点すべて幸安自筆の原本であった。幸安は東北地方の地図作製に積極的でなかったと考えていたが、それを覆される結果だった。七点から得られた新情報は以下の通り。

① 幸安著『日本志』東山道部に新たに七枚加えられることになった。

② 「陸奥出羽両国地図」は、京都大学附属図書館の後世に よる写図しか知られていなかったが、原本に相当する地図が見つかった。

③ 「南部之地図と南部管領地図を併合して見るように」、また「南部之地図は蝦夷国図と併合して見るように」、「南部管領地図は仙台管領地図及び津軽領出羽国の地図と併合して見るように」記されている。これは、「地図と地図を繋ぎ合わせる」という幸安独自の発想である。

④ 前著図版一九四「仙台管領属城図」(北野天満宮所蔵)の識語にある「仙台管領二十一郡の地図」は、函館の「仙台



図1 南部之地図



図3 南部管領地図

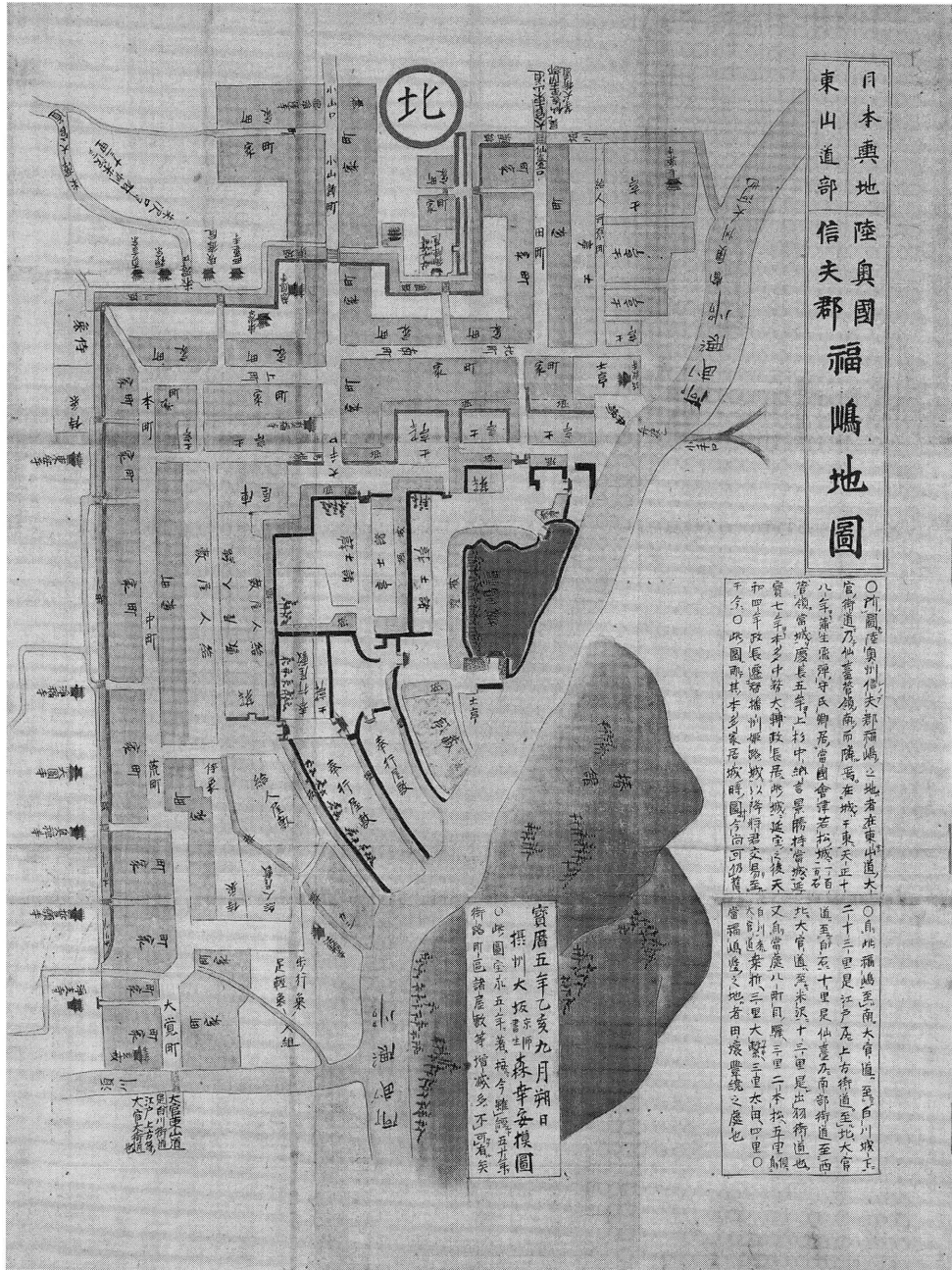


図 5 福嶋地図



图6 陸奥国白川地圖

管領地図」のことである。

⑤ 幸安に地図を提供している人物として何度も登場する宇野宗明、渡辺吉賢、故本多家を、再び確認できた。

⑥ 極力新しい地図情報を載せる態度を「福嶋地図」や「白川地図」で再確認できた。

⑦ 「津軽地図」では、「行程記」と呼ぶ記録を参考に行っている。

二 新出の幸安地図——その二

国立国会図書館所蔵分

函館調査を進めていく中で、さらに興味深い発見があった。

地図七点を収める装幀に、「森幸安（謹齋）編 日本輿地図八十五枚 帝国図書館 二二三函 四八号」という記載のある付箋が貼り付けてあった。「帝国図書館」とあるため、『増訂帝國図書館和漢図書分類目録 地誌及紀行之部』（明治三十五年五月三十一日）を開いてみた。四四頁に、たしかに「日本輿地図森幸安（謹齋）編八五枚」と書かれていた。国立国会図書館に問い合わせたところ、東京本館の古籍籍資料室で閲覧できとのことであった。調査してみると、大半が幸安自筆の原本と見られるものであり、これまた大収穫となった。

そこで、国立国会図書館所蔵幸安地図に関する情報を記しておきたい。当館の幸安地図は「日本輿地図」という総タイトルのもと、八つの帙に計八十五枚の地図が分割収納されている。

ただし、九点は幸安自筆の地図のものがどうか疑わしい内容ではある。が、検討に値する。ただし本稿ではこれ以上立ち入らない。帙への格納はもちろん現代に入ってからであるが、地図に「購求明治三四・五・四」の朱印が押されていることから、明治後期に国会図書館が古書店から買い求めたのであろう。他にも、「儀岡」「萬源（カ）社印」なる旧蔵者の朱印が押されているが、詳細は不明である。おそらくは、江戸時代末期の国学者の手法から離れて明治時代の企業が購入し、その後古書店へと流れ着いたと考えられるだろう。

当館所蔵の地図は、おおよそ自筆のものと認められるが、他館で知られている幸安自筆の地図と比較して内容も寸法も同じものが多い。こうした地図は、自筆原本とはいえず、幸安自筆による写図（複製品）と見なすことができる。

そこで、まずは他館の地図と同じ内容を持つ写図から紹介しておこう。調査方法は、前著ならびに函館図書館の時と同じである。

凡例

地図名の次の請求番号は、国会図書館の請求番号「二二三／四八」に続く枝番号を示す。

備考の省略記号について（前著目録参照）

「公」は国立公文書館所蔵の略

「北」は北野天満宮所蔵の略

「金」は金刀比羅宮図書館所蔵の略
「京附」は京都大学附属図書館所蔵の略
いずれも記号の後に続く番号は、前著と同じく当該所蔵
機関の請求番号を指す。

幸安自筆の写図

地 図 名	請求番号	備 考
近世伏見地図	二	公二五に同じ。呉竹伏見地図 と二枚で一セット（大きき七 六・〇×九三・五）
呉竹伏見旧地図	三	公二六に同じ
京師内外地図	四	公一五に同じ
山城国地図	五	公六に同じ
山城国地図	六	公三に同じ
大和国地図	七	公七四―一に同じ
河内国地図	七	公五六に同じ
和泉興地図	八	公六四に同じ
摂津国地図	九	公三五に同じ
播磨国法華山画図	一六	北一〇―二―一四（六六） に同じ、四枚一セット
芸州廣島地図	一六	北一〇―二―一四（六七） に同じ、四枚一セット
周防国岩国金臺橋図	一六	北一〇―二―一四（六八） に同じ、四枚一セット
長門国長府地図	一六	北一〇―二―一四（六九） に同じ、四枚一セット
備前国地図	一八	公一五六と同じ
美作国地図	二〇	公一五八と同じ

地 図 名	請求番号	備 考
備後国深津郡福山之地図	二四	公一五七に同じ
因幡国地図	三五	公一四五に同じ
鳥取之地図	三六	公一四四に同じ
豊後国地図	四四	公一九三に同じ
筑前国地図	四五	公一八八に同じ
筑前国博多八景致図	四六	北一〇―二―一四（八六） に同じ、三枚一セット
豊前国羅漢寺地図	四六	北一〇―二―一四（八七） に同じ、三枚一セット
筑紫箱崎八幡宮地図	四六	北一〇―二―一四（八五） に同じ、三枚一セット
筑後国地図	四七	公一八九に同じ
豊前国地図	四七	公一九二に同じ
対馬国興地図	四七	北一〇―二―一四（八八） に同じ
宍岐国地図	四七	公一九七に同じ
肥前国地図	四八	公一九〇に同じ
対馬国地図	四九	公一九九に同じ
肥後国地図	五〇	公一九一に同じ
日向国地図	五一	公一九四に同じ
大隅国地図	五二	公一九五に同じ
薩摩国地図	五三	公一九六に同じ
若狭国地図	五四	公一二七に同じ
越前国地図	五五	公一二八に同じ
加賀国地図	五六	公一二九に似ている
能登国地図	五七	公一三〇に似ている
越中国地図	五八	公一三一に似ている
越後国地図	五九	公一三二に同じ

地図名	請求番号	備考
佐渡国地図	六〇	公一三三に同じ
遠江国地図	六一	公八七に同じ
常陸国地図	六二	公九六に同じ
上総国地図	六三	公九四に同じ
安房国地図	六四	公九三に同じ
伊豆国地図	六五	公九〇に同じ
相模国地図	六六	公九一に似ている
武蔵国地図	六七	公九二に似ている
下総国地図	六八	公九五に同じ
伊賀国地図	六九	公八三に同じ
甲斐国地図	七〇	公八九に同じ
志摩国地図	七一	公八四に同じ
尾張国地図	七二	公八五に同じ
伊勢国地図	七三	公七五に同じ
駿河国地図	七四	公八八に同じ
三河国地図	七五	公八六に同じ
三河国地図	七六	右の七五と同じ
下野国地図	七七	公一一七に同じ
信濃国地図	七八	公一一五に同じ
上野国地図	八〇	公一一六に似ている
美濃国地図	八一	公一一三に似ている
近江国地図	八二	公一一二に似ている
飛騨国地図	八三	公一一四に似ている

「同じ」と書いた分は、書誌情報も内容的にも全く同じものであるが、「似ている」と書いている分は、他館の幸安地図には年記や識語が書かれているのに、それがなかったりするなど他館地図と若干の違いが認められるが内容自体に大差ないものを

対象としている。

自筆下書き

地図名	請求番号	備考
城池天府京師地図	一	公一七の下書き

一点だけ、未完成の幸安地図がある。当地図は、洛中の北部辺りを描きかけた地図であるが、年記も原本と同じであり寸法も大差ない。

新発見の原本地図

地図名	請求番号	備考
備前国地図	一七	金五三の原本
美作国地図	一九	金五二の原本
備中国地図	二一	金五五の原本
半国按		
備中国地図	二二	金五六の原本
半国著		
備後国地図	二三	金五七の原本
安芸国地図	二五	金六〇の原本
安芸国地図	二六	金五九の原本
周防国地図	二七	金六一の原本
長門国地図	二八	金六二の原本
長門国地図	二九	金六二の原本（右の二八と同じ）
丹波国地図	三〇	金三九の原本
丹波国地図	三一	金四〇の原本

地図名	請求番号	備考
丹後国地図	三二	公一四二・一四三のセット原本
但馬国地図	三三	本
因幡国地図	三四	金四二の原本
出雲国地図	三七	金四三の原本
伯耆国地図	三八	金四六の原本
石見国地図	三九	金四八の原本
隠岐国地図	四〇	金四九の原本
陸奥出羽両国地図	七九	京附の原本か

国会図書館所蔵分の調査の結果、判明したことは以下の通り。

- ① 従来知られていた幸安自筆地図と同じ内容を持つ多数の幸安自筆写図と見られる地図が伝存していた。
- ② 後世の写図しか知られていなかった地図の原本に相当する地図が多数見つかった。
- ③ 幸安自筆の下書き図が新たに一点見つかった。

おわりに

函館市中央図書館所蔵分の調査の結果、前著で解明した地図の校合方法や幸安に地図を提供した人物などを再確認できた。さらに、国会図書館所蔵分からは、幸安が同内容同形態の複製品を大量に複製していた事実が分かった。なぜ幸安が複製品を多く残したのだろうか、という新たな疑問もわき起こった。また、東北地方や九州地方など日本列島の両端に位置する地域は

手薄と思われていたが、東北地方で七点も確認できたことから、まだまだ日の目を見ない幸安地図があるのではないか、という期待を持つことができた。一点でも多くの幸安地図を集め、幸安地図の解明に役立てられるようにしたい。

なお、本報告は、トヨタ財団研究助成金による研究成果の一部である。

末尾に改めて高木氏のご厚意に謝意を申し上げて筆を擱くこととする。